

## 風景と音・音風景／人間と社会

—— 耳を澄まして ——

Landscape and Sound・Soundscape / Human Being and Society

— Silence and Listening —

山岸 健\*

Takeshi YAMAGISHI

### <キーワード>

人間, 時間, 空間, 日常生活, 人生  
意味, 音, 音楽, 雑音, 騒音, 闇  
光, 絵画, トポス, 大地, 風,  
風景, 音風景, 環境, 世界

### <要 約>

人びと、それぞれの人生の旅路となっている日常的世界、社会的世界、風景的世界は、大地と宇宙的自然によって支えられている。いずこにおいても人間と環境に注目しながら環境の音、いわば〈音風景〉に耳を傾けなければならない。時代と地域、地方に応じて音や音風景に相違が見られる。時代とともに消えていった音があるし、時代、時代において新たに生まれた音がある。

日常生活に人生がある。人生の日々は、風景や音風景のまっただなかで、人びとのなかで刻々と過ぎていくが、日々、生き生きと意欲的に情熱的に創造的に生存することが、私たちに求められている。広く深く生きるために体験の領域、意味世界の充実をはかることが必要だ。

さまざまな音に身心を委ねて音や音楽に耳を澄ますことによって人間の生活と生存の領域、人間的世界が、一層、広がりや深まりを見せることだろう。

さまざまな音は、自然や、人間的世界の現象であり、こうした音によっても多元的現実がかたちづくられている。

音楽、雑音、騒音、まことにさまざまな音、沈黙、静寂…… 音の地平だ。多様な音、瞬間的な音、持続的な音…… 音は消えていく。消えていく音に音の深みと無限性が感じられる。音の効果がある。再生された音や人工音、効果音があるが、音の原風景として風の音、人間の声（聲）、生活音などに耳を澄ましたい。

音や音楽の慰めと喜びがある。音や音楽に託された希望がある。人間の生活と生存、人生の日々は、さまざまな音によっても支えられており、音や音楽によって方向づけられている。

人生の旅びと、行為者、人間は、生命力であり、生存の力だが、こうした力にはさまざまな状態で音や音楽が深く入りこんでいる。

“人生に意味を”——サン＝テグジュペリの言葉に注目しながら、耳を澄まして、環境と世界に身心を委ねていきたいと思う。

---

夜が明けそめるころ、ドアと窓をあけ放って座っていると、部屋のなかを飛んでいく、目にも見えず姿も想像できない一匹の力のかすかなうなりが、名誉を称えらるどんなラッパの音にも劣らない感動を私に与えるのだった。それはホメロスのレクイエムであった。そのうなり自体が、怒りと漂泊を歌いながら宙を飛んでいく『イリアス』であり『オデュッセイア』であった。

---

日曜日には、風向きがよいと、ときどき、リンカン、アクトン、ベッドフォード、コンコードなどの鐘の音が聞えてきた。それは原生林にもちこむのにふさわしい、かすかな、心地よい、いわば自然の旋律であった。森を越えて十分な距離をとると、その音は地平線のマツの針葉がハーブの弦となってかき鳴らされているような、一種のふるえを帯びたうなりに変わる。あらゆる音は、最大限の距離をへだてて聞くと、まったくおなじ効果を生み、宇宙の縦琴の振動音となる。

---

地球は、書物のページのように何層にも堆積した、主として地質学者や古物学者の手で研究されるべき単なる死んだ歴史の断片ではなく、花や果実に先駆ける木の葉とおなじように生きている詩である——化石となった大地ではなく、生きている大地である。

H・D・ソロー

---

水　　泉を愛してくださいね。小川の音を聞いてくださいね。私はいつもそこにおりましょう。

メーテルリンク

---

窓の下の街路にこんなコンポジションを見た。女が小さな手押し車を押し、その車の前には手まわしオルガンが縦向きにのせられている。そのうしろに籠が横向きに置かれ、その籠のなかに嬰兒が帽子をかぶせられ、両足を踏んばってうれしそうに立ち、すわっていることを背んじない。女は手まわしオルガンのハンドルをときどきまわす。すると嬰兒は足を踏みしめながら籠のなかに立ってしまうのである。緑色の晴着を着た小さな娘が踊って、窓を見上げながらタンパリンを打ち鳴らす。

---

サン・ミッシェルの遊歩道はひっそりとして広く見えた。かすかに坂になっていて、軽々と歩けた。頭上でガラス窓が明るいひびきで開き、その反射が白い鳥のように街路を翔んだ。うす赤い車輪の馬車が通りすぎた。ずっと下手を歩いている人の荷物がうす緑色である。ぴかぴかと光る馬具をつけた馬が、水をまかれて黒くしめっている清潔な車道を駆けて行く。風はいきいきとして新鮮でなごやかであって、さまざまなものが昇る、香りと呼び声と鐘の音とが。

ライナー・マリア・リルケ

---

吹き染める風がお前の高い枝のなかでざわめく。風はそこに泉を置き、わたしは清冽な大気に耳を傾ける。

ポール・ヴァレリー

---

たえずどれかの時計が時を打ち、ここかしこでオルゴールが鳴ります。というのは、ぜんぶの時計がみんなべつべつの時間をさしているからです。

けれどそこから生まれる音ぜんたいは、ちっともふゆかいな騒音ではなくて、ほら、あの夏の森で聞えてくるような、規則正しい、きもちのよいざわめきなのです。

---

丸天井のまんなかから射しこんでいる光の柱は、光として目に見えるだけではありませんでした——モモはそこから音も聞えてくることに気がついたのです！

はじめそれは、とおくの木のこずえにたわむれる風のざわめきのように聞こえました。けれどその音はしだいにはげしくなって、滝の音か、岩に打ちよせる波のとどろきに似てきました。

よく聞いているうちに、それは数えきれないほどの種類の音がひびきあっているのだということが、はっきりしてきました。それらはたえずたがいに入りまじりながら新しくひびきをととのえあい、音を変え、たえまなく新しいハーモニーをつくり出しています。それは音楽のようであって、しかもまったくべつのものです。そのときとつぜんモモは気がつきました。まえによく、きらめく星空の下でしずけさにじっと耳をかたむけていたとき、はるかかなたからひそかに聞えてきた音楽が、これだったのです。

ミヒャエル・エンデ

---

今はもう聞かれなくなった。もろもろの「呼び声」の中でも、「小鳥の餌のこべはいかが」を覚えている人があるだろうか。いったい、胸にしみる優しさの調べのこもったこの歌を作ったのは、どこの、どういう悟り切った人なんだろう。この優しい嘆きの歌は、人に聞かれることも初めから断念しているみたいだ。胸に秘めた悲しさからもれ出してくる呻き声。この歌が聞かれたのは、パリでもいくつかの通りにかぎられていた。小さな単調な文句が、

市場のひどい喧騒の中を通り越してくるのだった。野菜売りの怒鳴り声にも、車のわだちの音にも消されてしまわずに、そうした騒音の脇を通りぬけてくるのだった。

ジュリアン・グリーン

7月10日

ひぐらし  
 蜩の聲を後山に聞きぬ  
いっせいに  
 一聲さやかにして銀鈴を振れる如し  
 (場面がかわって)

談笑の聲あり

笛聲あり

花火を揚ぐる子供あり

徳富蘆花

※ 2011年10月11日、逗子市の蘆花記念公園 桜山古墳の地でノートした言葉。  
 後山は桜山をさす。

人は街路で実に生きている。あらゆる生活をそれぞれ背負って、家庭では決して見られない街路独特の真剣な顔をしている。(中略) 街路をゆく私の心を一番打つのはやはり人間の声である。生きた言葉である。人間が不用意に必要に応じて迸へいしゆつ出させる声と言葉とである。

この微妙な生きものを耳に捉とらえるためのみにも、街路は私にとって山や海に劣らない魅力を持つ。日本橋あたりの交叉点に立つ。電車とトラックと鉄骨をうつ電気ハムマアとの未来派的渦流音の中にまき込まれつつも、漠然と、しかも確然と湧わき上る群集の声の不協和音は、何という心をそそる音だろう。まったくそれは下手な交響楽のアレグロ・アッサイどころの及ぶところではない。そういう総合音の中から、きらきらと生きた言葉がきこえて来る、川瀬に光る小魚の銀の腹のように。

高村光太郎

《エピグラフの出典》

H・D・ソロー——ソロー，飯田 実訳『森の生活 ウォールデン』岩波文庫，上巻159ページ，住んだ場所と住んだ目的，223ページ，音／下巻，248ページ，春。

メーテルリンク——メーテルリンク，堀口大学訳『青い鳥』新潮文庫，374ページ，第6幕第11場お別れ。

リルケ——リルケ，望月市恵訳『マルテの手記』岩波文庫，67ページ—68ページ。

ヴァレリー——ポール・ヴァレリー，清水 徹訳『エウバリノス，魂と舞踏 樹についての

対話』岩波文庫，188ページ，樹についての対話。

エンデ——エンデ全集 3 『モモ』大島かおり訳，岩波書店，212ページ，243ページ。

グリーン——ジュリアン・グリーン，田辺 保訳『パリ PARIS』KT INTERNA - TIONAL, 123ページ，失われた呼び声。

徳富蘆花——逗子市の蘆花記念公園においてのノート。

高村光太郎——高村光太郎『芸術論集 緑色の太陽』岩波文庫，244ページ，生きた言葉。



ブルーテンブルク城：ミヒャエル・エンデ記念館にて，2011年11月4日

人びと、それぞれの人生行路には、つぎつぎにさまざまな人びとが姿を見せる。また、人びとばかりではなく道具や家具や作品、部屋、庭、建物、さまざまな道、都市空間、いろいろな片隅、場所などが、日常生活や旅の日々に姿を見せている。いろいろな色や形、コンポジション……自然の姿、形、色彩がある。つぎつぎに風景が体験される。一日、一日、日常生活によって人生行路がかたちづくられつづけている。行動し、行為し、制作したり、創造したりする人間、たえまなしに環境や世界、さらにさまざまな現実を体験している人間、こうした人間によって、環境と時間と空間をふまえて、世界、まさに人間的世界が構築されつづけているのである。

ヘラクレイトスは、「太陽は日ごとに新しい」といったが、日々、新たな一日が始まるのだ。人間にとっては、生、生きることは、大切な使命であり、生活し生存することが、人生の旅びとにとっては重要な課題なのだ。

同じ川には二度、入れない——ヘラクレイトスの言葉だが、流れゆく水の姿、風景ほど人びとに深い思いを抱かせる風景はないだろう。水の流れ、川は、人間にとってまことに象徴的だ。流れゆく水、川を体験しながら、そうした流れがやがて姿を現すはるかかなたの大地と地方、風景を思い浮かべた人物がいる。イタリアへの旅の途上のゲテテだ。

人間存在という表現があるが、人びと、それぞれの生活史と人生、人間の活動に注目するならば、人間を生成的存在、生成／存在と見る方が妥当だと思う。こうした人間は、いずこにおいても、いつでも環境と対話しながら、時間的で空間的な日常的世界、社会的世界、風景的世界の形成と構築にたずさわりながら、人びとのなかで、社会において、風景のまったただなかで身心を支えつづけているのである。

人生行路は、人びとや人間関係、集団生活、日常生活によって意味づけられているが、風景によっても、さまざまな作品によっても、さらにおりおりの旅によっても意味づけられてきたのである。日常生活をできるだけ活性化させながら、一

日、一日を生き生きと晴れやかに、情熱的に生きること人びとは心をくだきつづけてきたのである。

人生と日常生活こそ社会学の根底、原風景であり、社会学のよりどころ、道しるべ、大地ではないかと思う。

社会は人間社会、だから社会へのアプローチと人間へのアプローチを切り離すことはできない。18世紀のことだが、ジャン＝ジャック・ルソーは、社会において人間を、人間において社会を、という見方を示している。社会学の命名者、創始者、オーギュスト・コントは、ルソーの思想と方法を形而上学的段階に留まっている見方としてとらえている。神学的段階——形而上学的段階——実証的段階、コントがいうところの知識の進歩の三段階の法則である。コントは、実証哲学をイメージして、社会学を世に送り出す。『実証哲学講義』の第4巻において、社会学 *la sociologie* という名称が姿を現す。1839年のことだが、コントにおいては社会学の胎動は、1820年代に始まっている。この頃、パリの都市空間には鉄骨ガラス張りの通路であるパサージュが造られたのである。遊歩者、フラヌールがパサージュに姿を見せる。遊歩者が向かう先には百貨店、こういった人物がいる。ベンヤミンだ。ボードレールやベンヤミンのパリ、アジェのパリ、印象派の画家たちのパリ、ユゴーやバルザックやゾラのパリ、カミュのパリ、サルトルのパリ、また、ショパンのパリ、高村光太郎のパリ、九鬼周造のパリ、ヘミングウェイのパリ、まことにさまざまな人びと、それぞれのパリ、名もない人びとや旅びとのパリがある。マルセル・ブルーストのパリがある。彼はパリを石の都と呼ぶ。島崎藤村は、パリを体験しているが、パリには響きがあり、東京には声がある、という。さまざまな詩人のパリがある。堀口大学のパリもある。前々からパリは光の都といわれてきたが、パリの相貌と光景、風景、景観、パリの音と音風景は、多様、多彩、変転きわまらない。

パリのセーヌ右岸にはモンテーニュ街やジャン＝ジャック・ルソー街があり、セーヌ左岸には

オーギュスト・コント街がある。若き日にパリで生活していたルソーは、『エミール』の出版によって追われるようにしてパリを離れて、各地を転々とする。ある時、ルソーはスイスのビエンヌ湖の小島に姿を現し、そこで短い期間だったが、夢心地の日々を過ごす。晩年、ルソーは、パリへ。水と緑の人、ルソーは、晩年のパリにおいては、サン＝ジェルマンの野に出かけて、緑に身心を委ねている。水の音、小鳥の音、野の草花は、ルソーにふさわしい自然と大地の恵みである。ルソーは植物を大地の飾りと呼ぶ。ルソーの生活史を見るとパリのヴァンセンヌの森のとあるところで不自由な境遇に置かれていたディドロをルソーが見舞った日がある。その時、この森のなかでルソーは、自然状態をイメージしたのである。自然状態に着眼したルソーの考察は、やがて大きく花開いていく。

パリは名だたる都会であり、文明と文化の都、光の都だが、パリの自然がある。パリの空があり、パリの森や緑がある。パリの光と明暗、闇がある。パリの音と音風景がある。パリの奥底、パリのふところの深いところ、パリの真相、パリの中核、支柱は、いったいどこに見出されるのか。

アルベール・カミュは、パリを感性を磨くための舞台装置と呼んでいる。ベンヤミンは、パリを鏡の都と称している。さまざまな旅びとのパリ体験によってかたちづくられたパリ像がある。それは意味世界としてのパリである。

ロダンやリルケのパリがあり、永井荷風のパリ体験とパリ像がある。リルケの『マルテの手記』に見られるパリがあり、荷風の『ふらんす物語』に姿をみせるパリがある。ヘミングウェイの『移動祝祭日』、この作品は、パリ讃歌だ。また、ヘンリー・ミラーのパリがある。

パリのセーヌ左岸、モンパルナス通りとラスパイユ通りに近いところだが、メトロのラスパイユ駅の近くに一筋の道、街路がある。道幅は狭い。かつて高村光太郎や藤田嗣治らが、この一筋の道、カンパーニュ＝プルミエール街のとあるところに居場所を定めて、パリ生活を営んでいた。佐伯祐三には、このカンパーニュ＝プルミエール街の門

を描いた絵がある。高村光太郎は、この通りの住居からシテ島のノートル＝ダム寺院を訪れて、「雨にうたるるカテドラル」という詩を残している。歩いてシテ島に向かったのかもしれない。カンパーニュ＝プルミエール街のとある角にある建物に写真家、アジェが居を構えて、パリ生活を営み、パリのさまざまな地点や場所、通りや建物、店などを撮影している。

文学や絵画、写真など、さまざまなジャンルの作品に姿を見せたパリがある。スペクタクルとしてのパリ、万華鏡としてのパリ、イマージュとしてのパリ、さまざまな事件や出来事の舞台や現場としてのパリ……など、まことにさまざまなパリがある。

カンパーニュ＝プルミエール街にひっそりと姿を見せている小さなホテルがある。それは、ホテル、イストリアーマン・レイ、モンバルナスのキキ、ルイ・アラゴン、マルセル・デュシャン、ライナー・マリア・リルケなど広く知られた人びとゆかりのトボスだ。

ギリシア語、トボス τὸπος には場所、位置、地点、ところ、家、部屋、坐席、村や町などの集落、職業、チャンス、さらに墓や墓地などという意味がある。

カンパーニュ＝プルミエール街、フランス語、リュ rue には通り、街、そのあたりに住んでいる人びと、という意味がある。

時代がさかのぼるが、かつてモンテスキューは、大都会を世界を旅する人びとにとって故郷と呼んだことがある。さらにさかのぼるとモンテーニュは、みごとにパリを称賛している。

あまたの作品に登場するパリがあり、ベンヤミンのパリがある。ある時、ベンヤミンは、セーヌ左岸のサン＝ジェルマン＝デ＝プレの交差点に位置しているカフェ、ドゥ＝マゴの片隅でパリの片隅に身を寄せている自分の立場と境遇についても思いにふけっている。彼は街路や歩道と接しているようなカフェテラスにいたのか、それとも建物の内部の奥の方の席についていたのか。

カフェ、ドゥ＝マゴにはサン＝ジェルマン＝デ＝プレ教会の入口を間近に見ることができるよう

なカフェテラスやさまざまな席がある。このカフェとこの教会のすぐ近くの建物の上の方の階にジャン＝ポール・サルトルの住居があった。サルトルは、おそらくドゥ＝マゴやすぐ近くのカフェ、フロールに足を運んでいたにちがいない。

サルトルには自己欺瞞的行為という言葉がある。社会学の役割演技論やアイデンティティ論とかかわりがあるような見方だ。カフェのボーイにはボーイのダンス、動き、身ぶり、まなざし、マナーがある。ボーイは、いったいどこまでボーイなのか。

カフェ、ドゥ＝マゴのさまざまな席、トポスにおいて、さまざまな音環境が体験される。私たちのパリ体験の場面だが、街路や歩道、まさに道端のカフェテラスの席においては、驚くばかりに激しい物音が耳に触れる。こうした席は、風のトポスだ。道ゆく人びととふれ合いそうになる時がある。パリの活気が、風景として、音として、時には圧倒的な迫力で体験される。ほとんど音の壁と呼びたくなるような音風景＝環境音が体験されることがある。音の壁——サウンドスケープ（音風景）研究における着眼点のひとつだ。

カフェの建物の奥の席ともなると耳に触れる音の様相がずいぶん変わる。

サン＝ジェルマン＝デ＝プレの教会の内部に入ると全体として暗々としており、森のなか、林のなかというような感じがする。この教会で開かれたコンサートに何度か出かけたことがある。場所と空間、建造物の様相によって音響や音の効果が異なっている。

都市空間の地点、地点、さまざまなトポスや通り、片隅、片隅の音や音響がある。

マルセル・プルーストは、土地のさまざまな場所は、また人間でもある、と書いているが、人間の個性と同じように土地や場所の唯一性があるのだ。その土地、その場所で耳に触れる音や音風景によっても大地やトポスや道の特徴、唯一性が、はっきりと体験されるのである。

音は環境や世界の出来事、現象であり、宇宙的自然や大地と一体的な、また、人間の活動的生活、生存と深く結びついている現れなのだ。それにし

てもなんとさまざまな音や音色、音響が、つぎつぎに私たちの耳に触れていることだろう。音があり、音楽がある。ところによっては静寂が体験される。沈黙の状態がある。音と音の間や間合いがある。音はさまざまな状態で消えていく。残響がある。いろいろな効果音がある。音源、音質、音量、音の強弱、音色などの多様性と変化は、驚きに値する。

ところが変わると音が変わる。楽器が変わると音が変わる。旅にかかわる場面だが、旅先でどのような音が耳に触れるのか、こうしたことを楽しみにしていた人がいる。箏曲の宮城道雄だ。目が不自由だった彼の耳に注目したい。ヘレン・ケラーの手と耳においてクローズアップされてくる現実と環境や世界がある。ヘレン・ケラーにおいては接触体験と震動体験によって明るみへの道がかたちづくられたのである。

音といえば、環境であり、世界、風である。音とともに耳がクローズアップされてくる。いつも開かれている耳、耳は眠ることを知らない。私たちは、さまざまな音によってどんなにか救われてきたことだろう。夢見心地になるような音や音楽がある。だが、その場から逃げ出したくなるような騒音や雑音がある。沈黙という言葉がある。——音、沈黙と測り合えるほどに、これは武満徹の表現だ。

さまざまな音に耳を傾けていると音の万華鏡、音の宇宙、音の博物詩というような言葉を用いたくなる。色も形も、音も、光も明暗も、闇も、一筋縄ではいかない。

眺めていると私たちの感性と想像力に働きかけてくるような言葉がある。例えば、森——林——木、糸——絆——縁、音——闇——明暗……木や糸が入っているような文字、言葉があり、音が聴こえてくるような、聞こえてくるような言葉がある。耳が姿を見せる文字や言葉がある。声——旧字では聲だ。音と耳は不可分だが、音は耳ばかりではなく人間の五感に、身体、全身に、想像力に、感性にさまざまな状態で働きかけてくる。

人間は、身体によって、感性と想像力によって、記憶と世界体験、環境体験によって、人間と人間



との触れ合いと人間関係によって、社会によって、環境と世界に巻き込まれているのである。音によってもそうなのだとはいえるだろう。命綱といえるような音がある。

人びとや他者との触れ合いや結びつき、絆、縁、人間関係によって、共同生活や集団生活によって私たちがそこで生活し、生存している環境や世界、現実が、なんと広々としたゆたかな舞台となっていることだろう。できるだけ広く深く人生の日々を生きるために他者との触れ合い、人びととの結びつき、絆が、きわめて重要だということを理解しない人はいないだろう。

音や音環境に耳を澄ますことによって私たちの日常的体験と日常的世界、人間的現実、意味と意味世界は、まことに充実した意義深いものとなるのである。音によって生み出される人びと、それぞれの生活と生存の舞台と領域がある。

淡々として過ぎていく日々そのまま身心を委ねつづけるのではなく、過去をふまえて、未来を展望しながら、日々、新たに生きることを決意して、人生を旅することの責任を自覚し、意欲的に情熱的に前進することに全力を傾注すること、それが生存なのだ。生と死を自覚しながら人間の時間、まさに意味世界を深く生きつづけることが、生存と呼ばれる人間の旅の姿、生き方なのである。人間は意味のなかでプラクシス（行為・実践）とポイエシス（制作・創造）のまっただなかで、人びとのなかで、道具や作品のかたわらで、いつも大地や風景、音風景と一体となりながら、人生の一日、一日を生きているのだ。

音は、人間の生成と存在、人間の生活と生存の次元なのであり、音とともに体験される、音によって生み出される現実や世界、舞台、音の大地がある。

ジャン＝ジャック・ルソーは、思索と思想において注目に値する業績を残したが、緑の発見者と呼ばれてきたルソーは、明らかに風景を見出した人物であり、さまざまなエッセーのほかに小説を書き、音楽作品、作曲活動においても足跡を残している。オペラ「村の占師」や広く知られている「結んで開いて」という作品がある。ルソーのま

なざしは、風景と大地に、姿を現す早朝の太陽に、さまざまな草花、植物に注がれている。彼は植物を大地の飾りと呼んでいる。ルソーの心と感性が傾いていたのは、けわしい山道、モミの木、山岳地帯の景色、森、湖水、無人島だった。

リヨン郊外でのこと、その川がローヌ川だったのか、ソーヌ川だったのかルソーの記憶はおぼろげだったが、水のほとりで、流れの近くでロシニョル、夜鶯の鳴き声に聴き入りながら、ルソーは、眠りにつく。ルソーの言葉がある（『告白』）。——「目を覚ますと水と緑と美しい景色」まるで印象派の画家の風景画を眺めているような気持ちになる表現だ。セーヌ川のほとりのさまざまな景色と絵画が目には浮かぶ。

目を閉じる。目を開ける。誰もが日々体験していることだが、眠りにつくことは、表現しがたいほど深々とした体験だ。闇の世界が訪れる。夢を見ることがある。夢、なかば旅に出たような気分になることもある。夢と呼ばれる現実がある。目覚める時の喜びや生存感がある。ヘラクレイトスは、「太陽は日ごとに新しい」という。日々がくりかえされるのではない。新たな一日がはじまるのだ。

淡々として過ぎていく日々、と書いたが、はたしてそうした日々があるのだろうか。深くもの思うならば、一日、一日は、さまざまなエピソードや出来事に満ち満ちた劇的な日々だとしかいいようがないだろう。

ルソーは、太陽と水と緑の人であり、風景の人だが、ルソーの思索とまなざし、耳にも彼の感性と想像力にも注目したい。

ところでルソーには「私は誰なのか」（「私は何者なのか」）という言葉がある。社会学や人間学など、さまざまな分野と領域においてルソーのこの言葉と真剣に向き合わないわけにはいかないだろう。

ルソーゆかりの土地がある。シャンベリの郊外、レ＝シャルメット、この地でのヴァランス夫人との夢のように楽しい日々がルソーの生活史にある。ルソーは、早朝、起床して、太陽が姿を見せるシーンに立ち合う。このレ＝シャルメットを訪れ

たことがある。山間部の傾斜地、林間のおだやかな大地の片隅にルソーの家、ヴァランス夫人の邸宅が姿を見せていた。この地でルソーは自然と緑と一体となりながら、自然のさまざまな音に耳を澄ましていたにちがいない。ルソーは、くるくるとまわるものに興味を示している。風車かざぐるまの音が彼の耳に触れていたはずだ。

ある時、私たちは、家族でルソーがそこで生活していたモンモランシを訪れたことがある。火が燃えるところがあつたが、ルソーの耳にパチパチと燃える火の音が触れていたことだろう。このルソーの家の庭の片隅には石づくりのテーブルと椅子があつた。

ルソーの小説、『新エロイズ』（別名『ジュリー』）にはルソーの感性と想像力、またルソーの思想と方法が、生き生きとした状態で見出される。

パリのセーヌ左岸のパンテオンにはルソーが眠りについているところ（トポス）がある。トポスというギリシア語には家、部屋、坐席、場所などという意味とともに墓、墓地という意味がある。リュクサンブール公園やソルボンヌ広場からパンテオンまでは近い。

パリのセーヌ左岸のソルボンヌ広場には、オーギュスト・コントの記念像が姿を見せている。高い台座の上にコントの胸像が飾られており、台座のふもとには人びとが数名、見られる。記念するという歴史の心がゆたかだったコントの思想と方法に共感して、コントに学ぶところが多大だったアランは、試みにソルボンヌ広場のコントの記念像のまわりをめぐることでコントを理解することをすすめている。

永井荷風のパリ——荷風の『ふらんす物語』には、いよいよ明日はパリに別れを告げて日本へ帰国するという場面がある。パリの最後の一日が始まる。荷風の宿は、セーヌ左岸のパリの六区、カルチエ・ラタンにあり、荷風の耳にはソルボンヌの鐘の音が触れている。ソルボンヌ広場のコントの記念像に近い宿だ。人びとの生活の物音など、巷の音や声などが耳に触れる。最後の一日の過ご

し方を案じていた『ふらんす物語』の主人公、この私は、意を決して、いつも訪れていたリュクサンブール公園に向かう。メディチの泉のほとりはいつもの居場所だった。パリに別れを告げるこの私の目には子ども連れなど、さまざまな人びとの姿が映る。思い思いの姿を見せている人びとの生活情景を眺めて、私は〈生活の詩〉という言葉にめぐり会う。〈生活の詩〉——この言葉こそ社会学と人間学の原点をさし示しているといえるだろう。

生活の音、さまざまな物音は、〈生活の詩〉とひとつに結ばれているのである。人びとそれぞれの人生は、日常生活に凝縮されているのだ。社会的世界と風景的世界が、人びとのトポスと道、生活と生存の舞台となっているのである。

記念のトポス、歴史の舞台、トポスのなかのトポスということもできる。パンテオンのとあるところにシャヴァンヌが描いた絵画作品、「聖女ジェネヴィエーヴ」が姿を見せている。壁画の趣を見せている作品だ。

東京の荷風——『日和下駄』の一場面だが、ある日、荷風は、団子坂の観潮楼、森 鷗外の居宅を訪れる。鷗外を待っているあいだに荷風の耳に触れた音、荷風が鷗外の部屋で聴いたさまざまな音がある。市井の、巷の声、鐘の音、暮色が深まっていく。そうした時に荷風の脳裏に浮かんだパリがあつた。パンテオンのシャヴァンヌの絵画、「聖女ジェネヴィエーヴ」が思い出されたのである。荷風は、深い時間、人間的時間、いわば意味世界に身心を委ねている。

荷風の小説、『すみだ川』は、大川、隅田川がそのままモチーフとなっているような作品だが、荷風は、パリのセーヌ川を思い浮かべながら大川に近づき、大川を生きている。

絵画は残る。時代をこえて人びとの目に触れる。視界の創造、視界であり、視野、見ることに捧げられた祝祭、距離をとりながら生み出された距離を体験すること、光、明暗、闇、色と形、コンポジション、タッチ、画面の肌と表情、シュポール、主題・モチーフ、こうしたそれぞれを独自の現実および世界として体験すること——絵画および絵

画体験とはこうしたことであり、こうした人間の営みだが、音は消えていく。音楽も消えていく。楽譜は残り、録音された状態の音や音楽は、再生されて人びとの耳に、身体に触れるが、生の音は、つぎつぎに消えていく。音の微妙な様相と音の印象と深さについてあらためて思いを深くするばかりだ。

シュポールとは支え、台、支持体を意味するフランス語であり、例えば壁、板、紙、カンヴァスなどをさす。音や音楽のシュポールとなっているのは、いったい何なのか。ここでは、自然と大地、風景と音風景、人びとの暮らし、生活、人間関係、社会をイメージしたいと思う。

人生の旅びとは、いずこにおいても宇宙的自然のもとで、大気、空気や光の助けを借りて、大地に身心を委ねながら一日、一日を生きている。大地は光とともに姿を見せているだけではない。闇の訪れがあり、暗闇と明暗が体験されてきた。光と明暗は、絵画の原風景であり、光の訪れは絵画の始まりだ。日常的世界は、さまざまな形や色やコンポジション、物質、質感、まことに多様な音や香り、匂い、味わいなどが体験される生活と生存の舞台と領域である。人間は、身体によって、五感と想像力、理性と知性によって、感性によって環境と世界に巻きこまれた状態で大地に住みついてきたのである。さまざまな環境や世界に身心を委ねながら、こうした環境や世界と対話して、環境や世界との相互的交流、相互的交渉のなかで、たえまなしにトポスと道を体験しつづけることによって、さまざまな現実と世界が構成、構築されつづけてきたといえるだろう。

古代ギリシアのデルポイのアポロンの神殿の言葉、〈汝自身を知れ〉という言葉に注目した人びとは数少なくないが、そうした人びとの一人、ゲーテは、〈汝自身を知れ〉という言葉によって人びとのまなざしがもっぱら人間そのものの方に傾いていったことを危惧して、世界の方へ歩みよらなければならない、という。人びとのなかで、社会において、世界において、という視点と方法が、目の人、目と太陽の人、ゲーテに見られたのである。

目で見ても確かめることが、ゲーテの方法だった。イタリアの旅の一場面だが、ゲーテはヴェネツィアでゴンドラに乗って水の都の風景と風物を体験している。ゴンドラに揺られながらゲーテはヴェネツィア派の絵画を思い浮かべている。

ゲーテは明らかに絵画的印象の人だが、彼の耳にはヴェネツィアのさまざまな音が、この海と運河の水のヴェネツィアで触れていたはずだ。ゴンドラは、ヴェネツィアの肝心な視点とまなざしであり、ヴェネツィアの耳でもあるのだ。この水の都が、さまざまな運河と海に、また、いろいろな道と広場に、橋に、人びとの暮らしに、ヴェネツィアの建築や絵画や音楽に、音と音風景にあることに注目したい。

風景に関心を抱いていたコーニッシュは、風景を絵画的印象と呼ぶ。『日記』で名高いアミエルは、風景（景色）は、気分（心の状態）だ、と書いている。風景は、人生の旅びとが、容易に気分と思いと感性、想像力において自分自身を委ねることができる大地の眺め、人間にとっての支えなのだ。

この風景は自分だけの風景だと思っている人びとがいるだろう。サルトルがあるところで書いているが、自分にとってなじみの風景だと思っている地に誰かが踏みこんだとしたら、風景が盗まれてしまったと思う人がいても不思議ではない。自分の居場所、坐席、いわばトポス、また、いつもの道となっているような風景がある。

ロマン・ロランがブルターニュ地方を旅した時のことだったが、あるところで彼は、風景が自分自身から始まっている（広がっている）かのように感じたのだった。

このブルターニュ地方の大地と風景、人びと（の暮らし）などを描いて、やがてタヒチ島に渡って、タヒチで絵画作品を制作したゴーギャン、タヒチでの作品のなかに「われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこに行くのか」と題された大作、ゴーギャンの代表作がある。

あらゆる絵画は、光とともに、光のなかにあるが、さまざまな明暗や闇とともに、いろいろな光

とともに姿、形、色が、コンポジションなどが浮かび上ってくる光景、光の訪れ、それが絵画なのだ。だが、絵画において光と影、暗がり、暗闇を体験することは、光の体験とともに重要だ。

レンブラントの「夜警」、彼の代表作だが、この絵画を耳を澄まして鑑賞しなければならない。画面や絵画から音が排除されているわけではない。人びとがそこで人生の日々を旅してきた生活環境、居住環境、行動と行為の環境と舞台、人間の生活と生存の舞台と領域、日常的世界は、いつの時代であろうと、つねに音とともにあったのであり、静寂や沈黙の状態を含めて、音環境と呼ぶことができない環境はなかったといっても過言ではないだろう。音なしの生活、音を立てない日々、音から切り離されたトポスや道、環境や世界はないのだ。無音の状態を科学や技術の力を借りて作り出すことができたとしても、そうした状態と環境は、日常的で現実的な姿ではない。

人生を旅するという事は、いずこにおいても、なんらかの音を体験するという事だ。音の壁が人びとの行動と生活の空間や場所に生まれてしまい、音の遠近感や静かな音を体験することが時代とともに困難になってきたように思われるが、音の壁によって取り囲まれた状態で人間の生活と生存を維持していくことはできない。

静寂と沈黙について思いを深くして音のさまざまな様相について耳を澄ましながら環境の音＝音風景をできるだけ広く深く体験することが、この現代においておおいに必要とされているのである。

『夜警』においてはレンブラントの闇と光が体験されるばかりか、さまざまな音が私たちの耳に触れる。絵画史を見ると描かれた楽器が目に触れるが、楽器の音や響き、人の聲（声）、さまざまな物音、生活の音、自然の音などに耳を傾けて、耳を澄ましながら画面の隅々までゆっくりと散策しなければならない。

絵画作品や画面は、明らかに光の、明暗の庭であり、形と色彩の庭だ。こうした庭は、音や響の庭でもあり、〈耳を澄まして〉という方法は、絵画と呼ばれる世界体験、意味世界の旅においてどうしても必要とされるのである。

庭、庭園——自然と文化と人間の結晶であり、整えられた道とトポス（限定された空間、意味が与えられた、人びとのさまざまな思いやヴィジョン、記憶などが渦巻いている舞台と世界）——こうした庭園は、もともとの意味において樂園であり、庭、庭園の音や音風景がある。耳を澄まして大地の特別な場所と舞台を広く深く体験したいと思う。流れ落ちる水、流れゆく水、池のさざ波、<sup>し</sup>鹿おどし（添水、僧都）、水琴窟、風の音、雨音……宇宙的自然と大地は、人間の夢やヴィジョン、思い、記憶、空間感覚、造形感覚、風景感覚、歴史的伝統と結ばれて、さまざまな庭、庭園となってきたのである。

借景が姿を見せている庭園がある。和風、日本風、イギリス風、フランス風……などさまざまな方法による独自の庭園文化がある。

風はあくまでも自然だが、文化や方法、様式となった風（<sup>かぜ</sup>・ふう）がある。さまざまな風があるが、風という文字、言葉には注目しなければならないところがいくつもあるように思われる。宇宙的自然と大地は、風とともにある。ほとんど無風という状態があるが、人生の旅びとは、ほとんどいつもさまざまな風とともに生活しながら生存しているのである。

大地に姿を見せているトポスと道、人びとのさまざまな生活と生存の舞台、庭や庭園、地形や地勢、陸水、海岸などの状態と光景、風景、景観は、きわめて多様、多彩だが、いずこにおいても人びとによってさまざまな音と音風景が体験されてきたのである。音とともに音楽に耳を澄ますならば、人間の生存圏、生活と生存の舞台と領域、人間的世界は、なんと大きな広がりを見せることだろう。

人間は生命の輝きであり、人生の旅びとだ。人生の日々と旅路、人生行路において生命の輝きを増していくためには、いったいどうすればよいのか。誰もがいつもそれに巻きこまれていく環境と触れ合い、交わり、環境と対話しながら日常的体験をふまえながら時間的で空間的な人間的世界を築きつづけていくことが必要とされているのだ。他者との、人びととの触れ合いと交わり、交流、

風景、音風景の体験、作品体験、旅体験などによって人生の旅びとは、人間的時間と一体となって意味のなかで生きることができる。意味のなかでとは、人生を広く深く意欲的に情熱的に、ということだ。現在と瞬時だけが人間の思索と行動の舞台ではない。過去を生きながら未来を展望し、思い出や回想、追想、追憶、記憶、ヴィジョン、展望によって一日、一日を心新たに生き生きと生きるところに人間の使命が見出されるのである。

平凡な日常生活という言葉がある。— trivial round of daily life 日常生活が平凡な状態で、いつもどおりに営まれていることに安心と幸福感を感じている人びとがいるのではないと思われるが、日常生活にはさまざまなドラマや思いもかけないことが満ち満ちており、不安と苦悩と定めなさ（パスカルがいう人間の条件だ）が痛切に感じられる日々もある。力を出して、勇気をふるって前へ—誰もが願うことだろう。考える葦（パスカル）ではあっても人間は風にそよぐ葦（パスカル）だ。どうしてもさまざまなサポートと支え、よりどころが人間には必要だ。

人間の条件を人間が条件づけられていることとして理解したハンナ・アレントは、生命を維持するための労働、作品を制作するための仕事、公共生活を構築するための協調的活動を指摘して、こうした三側面を活動的生活 *vita activa* という言葉で統合している。人びとの相互的な結束と共同生活において、労働において、道具において、作品において人間は、まさに人間なのだ。道具をつくり、道具を用いる、作品を制作して残す、まさに人間といえるだろう。ジンメルは、家を建てること、道をつくること、橋を架けることにおいて人間をイメージしている。

さまざまな社会的遺産や文化、文明をどのように継承しながら社会をかたちづくり、人びと、それぞれの日常生活と人生を相互に共同しながら、たがいに支え合いながら築いていくのかということが、人生の旅びとにとっては日常的な課題なのだ。

幸福 *Glück* という言葉に特別な思いを抱いていたヘルマン・ヘッセは、人間的体験、精神的体

験、風景体験という言葉を用いながら体験を、いわば意味領域を展望している。ベートーヴェンの「田園交響曲」を傾聴することは精神的体験だが、このシンフォニーには風景が姿を見せており、耳を澄ましながら森や林間の風景を体験しているということもできる。体験の諸領域は相互に微妙に重なり合っているといえるだろう。

オーストリアのウィーンを訪れていた時、私たちは、家族三人で市電でウィーン郊外のハイリゲンシュタットに向かい、その地でベートーヴェンの家を訪れて、貴重な音楽空間とトポスを体験してから近くの森へ向かった。いくらか凍りがちの道を歩きながら田園のベートーヴェンの姿を思い浮かべたのだった。耳が不自由な状態にあった彼の姿と心境、つらい思いに心を動かされない人はいないだろう。

ところが変わってヴェネツィア、ヴィヴァルディの「四季」は、ヴェネツィアの音楽だ。私たちは、ヴェネツィアを旅していた時、ヴェネツィアの教会でこの「四季」の演奏会に出かけて「四季」の音と音楽、音風景に耳を澄ましたことがある。「四季」には風が楽曲のなかに入っており、風の音が耳に触れたのである。

時が移って、2011年3月5日（土曜日）ミュージア川崎、コンサートホールでヴィヴァルディの「四季」のコンサートに耳を傾ける。ヴァイオリンの演奏者は、千住真理子さん、NHK交響楽団の選抜メンバーとの演奏だった。翌、3月6日（日曜日）こんどは横浜のミナトミライのコンサートホールでつづいて同一の演奏者、メンバーで「四季」に耳を澄ます。同一曲目、同一の演奏者であってもコンサートホールが異なると空間の様相や音響空間の相違によって、おのずから異なった音宇宙、音楽世界、音の地平、印象が体験される。この二日間にわたる音楽体験は、貴重な世界体験となった。「四季」の世界の地平は広い。さまざまな風が耳に触れたのである。

音響空間や環境やトポスが変わると音の響や音の遠近感、音質、音量などに違いが生まれる。

ドイツにはゲーテ街道と呼ばれる街道がある。ワイマルのゲーテ、ワイマルにはゲーテとシラーの姿が見え隠れしている。この街道に沿ったアイゼナハにはバッハの家がある。アイゼナハの森を抜けた山の尾根にあたるにはルターがその一室で日々を過ごしていたヴァルトブルク城がある。ワグナーの楽劇の舞台となった城だ。私たちは、この城のほとんど真下近くのホテルに宿泊したが、雪景色や太々としたつららを静寂のなかで体験して、ルターやワグナーのシーンに近づいたのだった。ワイマルのホテルは、市の中心広場に面したホテル・エレファントだった。ある時、ベンヤミンがこのホテルに宿泊して、たまたま窓から広場を眺めている。広場に屋台が用意されて、やがて市場がオープンする様子を動きまわる人びとや音とともにベンヤミンが書き残している。

ゲーテ街道の旅では初めにマールブルクへ、三木 清が留学したことがあるマールブルク大学、大学町だ。私たちはマールブルクの中心広場に面した〈太陽〉というホテルに宿泊したが、宿泊階の最下層、入口から入ったトポスは、レストラン・ピアホールだった。私たちの客室は上の方、木組みが壁に姿を見せていた。〈太陽〉のさまざまな片隅、場所での音体験がある。クリスマスシーズンで広場にはさまざまな屋台が出ており、市場の風景、音風景、人と人との出会いと触れ合い、声、物音などが体験されたのである。私たちはラーン川のほとりに出て、流れゆく水と河畔の静かな風景を三人で体験したのだった。マールブルクは、雪の日だった。三木は、オットーやハイデッガーの教示にあずかっている。やがてドイツを去った三木は、パリへ、凱旋門の近くに居住して、フランスのモラリストたち、モンテーニュなどに親しむが、三木が本格的に取り組んだのは、パスカルの研究だった。

私たちは、マールブルクからアイゼナハへ、そしてワイマルへ、ゲーテやシラーゆかりのトポスを訪れる。そしてライプツィヒに向かい、感覚と感性の研究者、ペーター・ルックナー先生の特別な親切にあずかることとなった。ハレの教育と研究の舞台へ。また、ハレのハイドンゆかりのトポ

スへ。二家族、六人でライプツィヒのゲバントハウス、コンサートホールへ。——ライプツィヒ大学は、若き日、ゲーテが学んだ大学だ。私たちはゲーテの『ファウスト』の一場面姿を見せている居酒屋・料理店に足を運ぶ。『ファウスト』の光景が目につれたのである。ライプツィヒの市街地にはゲーテ像が姿を見せていた。私たちは、バッハゆかりの教会、聖トーマス教会を訪れた。バッハのトポスだ。

少しもどろが私たちのワイマル、クリスマスの季節で広場にはさまざまな店が出ており、広場の片隅には、せまいながらも子どもたちのために小さな遊園地が臨時に出来ており、乗物が動く音や子どもたちのにぎやかな声などが私たちの耳に触れたのだった。旅の日々は消えない。さまざまな音は、耳底に残っている。

ところでゲーテ、『ファウスト』の一場面ファウストが思い悩むシーンだ。——初めに言葉があったのか（『ヨハネ福音書』の言葉だ）。あるいは初めに意味があったのか。それとも初めに力があったのか。悩み果てた末にファウストは、ようやく解答にたどり着く。——「初めに行為があった」。ゲーテには行為の生産性という言葉がある。

ゲーテ街道ゆかりの地に生まれたマックス・ウェーバーがゲーテに関心を抱いていたとしても不思議ではない。行為は、マックス・ウェーバーの視点と方法となっている。音と音楽、楽器、記譜法へのアプローチとして音楽社会学がイメージされる彼の仕事と考察に注目していきたいと思う。ゲーテ街道に沿った地方にはハイドンも、バッハも、ゲーテも、ワグナーも、ルターも姿を見せている。マールブルク、アイゼナハ、ワイマル、いずれの地でも私たちは、雪模様の天候を体験したのだった。静寂のなかのさまざまな音が、ところによってはにぎやかな音が、私たちの耳に触れたのである。雪の日の音風景がある。

『ファウスト』の一場面——言葉も、意味も、力も、行為も、人生の旅びとにとっては、ことごとく深い意味を持っている。言葉によって、意味によって、行為によって、さまざまな力によって

人間と人間はつながり合っており、支え合っているのである。

言葉の力、意味の力、声や音声の力がある。自然の力、太陽の力、色彩力、音楽の力、音の力、さまざまな力に支えられて私たちは人生を旅している。モンテーニュは、言葉によって人間はつながり合っている、という。ハイデッガーは、言葉を存在の家と呼ぶ。彼は人間存在の本質を実存として理解している。——世界—内—存在、共同相互存在、死への存在、いずれもハイデッガーの表現だ。

サルトルは、人間の社会が歴史的である理由は、人びとが過去を記念碑として取り戻すからだ、と述べている。ピエールの不在は、カフェのテーブルや椅子との関係においてではなく、テレーズとの関係において不在が確認されるのである。カフェの音空間と音風景があるが、音風景の座標原点ともいえるのは、人間の声（聲）と風の音だろう。

音のシュポール＝支え、台、支持体となっているのは、人間の身体と大地、大気、空気、風ではないだろうか。メーテルリンクは、香りを空気の飾りと呼んでいる。メーテルリンクは、日常生活と日常的なものに深い意義を見出している。メーテルリンクには生の哲学への方向性が見られるように思う。彼のまなざしは、ごく身近なこと、日常的なもの、道端などに注がれている。人生においてほんとうに大切なもの、大切なことは、身近なところに見出されるのだ。

フランス哲学について考察した西田幾多郎は、体系的ではないが大切な着眼点が見出されるモンテーニュの思想、『エッセー』に注目して、モンテーニュに親近感を抱いていた哲学者、ライフ life の研究者である。西田にはフランス語、サンズ sens には、sense とも Sinn とも異なる独特の語感、ニュアンスがあるように感じられたのである。こうして彼は、日常的世界は、哲学のアルファ、オメガだ、という。社会学や人間学においても音や音風景の研究においても、まず日常的世界と日常生活における音に耳を傾けなければならない。身近な生活音、物音、部屋のなかの音、家

まわりの音、庭の音、家の片隅、片隅の音、音風景、台所の音、テレビや電話の音、さまざまな装置や器具などの音、ブザーの音、枚挙にいとまがない。CDの音楽、人間が発するさまざまな音、特別に耳に触れるのは、人間の声・聲だ。あらゆる音のなかでもっとも気になる音、魅力的な音となると人間の声ではないだろうか。言葉を発する話し声、独唱、合唱、斉唱の声、歌う声には特別な力と人間的な生命力、みごとな表情がそなわっているように感じられる。俳句や短歌を披露する声がある。詠唱という言葉がある。

ロラン・バルトには家庭交響曲という言葉がある。家の内外で耳に触れるさまざまな音は、まるでシンフォニーのように聴取されるのだ。ロラン・バルトは、聴取やテリトリーについてパリのコレージュ・ド・フランスで講義しているが、その時、バルトは、フランツ・カフカの音にかかわる記述（それはカフカの耳に触れた家のなかの物音についての文章だった）を紹介して、アパルトマンや自宅・家で耳に触れる音、物音の比較を試みている。音の風景という言葉がバルトによって用いられている。

バルトは、日本の俳句や生け花について自分の思いを文章に残している。

パリに注がれたバルトのまなざしがある。パリ土産となっているエッフェル塔にバルトのやさしいまなざしが注がれている。バルトの幼年時にフランスの南西部のバイヨンヌが大切な地として姿を現しているが、そのバイヨンヌを家族で訪れたことがある。バルトが愛惜の念を抱いていたバイヨンヌで私たちは、フランス南西部の光と大地、バイヨンヌの風景と音風景を体験したのである。私たちは、スペインのマドリードから列車でピレーネ山脈を越えてフランスに入り、乗り換えてバルトゆかりの大地へと向かったのである。

人間の声は、驚くばかりに多様であり、個性的だ。声質という言葉がある。ビロードのような声、かん高い声、太々とした声、聴こえるか聴こえないかというような声、ソプラノ、アルト、テノー

ル、バスのそれぞれの声、張り上げられた声、いつまでも忘れることが出来ない声、音楽の領域に耳を傾けたいが、日常生活では、声はいつもきわめて重要だ。ジャン・コクトオは、忘れがたい特別な声としてマルセル・ブルーストの声について書いている。

風の音と人間の声は、さまざまな音のなかでも基軸となる音ではないだろうか。肉声があり、録音された音声がある。肉声には表現しがたい味わいと魅力、独特の雰囲気があり、夢見心地に誘われるような声がある。深みをたたえた声や忘れがたい声がある。

声、旧字では聲だが、この旧字には耳という文字が入っている。音といえば、ただちに耳だが、耳を中心として音を聞く、聴く、傾聴する、耳を澄まして、という時には耳だけではなく想像力を含めて人間の五感や身体、全身が動員されているのだといっても過言ではないだろう。聴き入る、耳を澄まして、という時には音楽がイメージされるかもしれないが、虫の鳴き声や雨音、流れていく水の音、風の音、人の声などに傾聴する場面がある。耳という文字が姿を見せる文字がいろいろある。聲は耳と一体的だ。眺めていると感性や想像力に働きかけてくるような文字や言葉がある。——森・林・木・糸・絆・縁・緑、また、例えば繭。人間は、さまざまな方法で自分自身を委ねることができるような繭をつくりつづけているのではないかと思う。

住まうこと、旅することは、生成と存在、生活と生存において中心的な人間の営みではないだろうか。サン＝テグジュペリは人間を住まう者と呼ぶ。ハイデッガーは、命に限りがある状態で大地に住まう者として人間をとらえている。人間は、ハイデッガーにおいては世界—内—存在、共同相互存在、死への存在なのだ。天と地のあいだ、生と死のあいだ、楽と苦のあいだ……。こうしたさまざまなあいだこそハイデッガーがいう世界なのだ。

大地——ルソーは大地を人類の島と呼ぶ。モリス・メルロ＝ポンティが見るところでは大地は空間と時間の母胎なのだ。地球を生きている詩、

生きている大地と呼んだ人物がいる。その作品、『森の生活』（『ウォールデン』）のなかに「音」と題されたパートを用意したH・D・ソローである。

マリー・シェーファーによって音風景、サウンドスケープ研究が創始されたが、音へのアプローチは、さかのぼっていくとソローやルソーなどにおいて、その扉が開かれ始めていることに注目したい。ソローは、みごとなまでに耳の証人なのだ。だが、人生の旅びと誰もが、心がけ次第で耳の証人に近づくことができるだろう。耳を澄ますということは宇宙的自然や大地や風景、歴史的伝統や文化や文明、環境と世界に身心を委ねながら時間と空間を、人生の日々と人生を深く深く、広々と生きることなのである。日常性に心を傾けながら日々の体験を一層ゆたかに活性化させていくことは、私たちにとって大切な使命なのだ。自然の音、文化の音、文明の音、人間の音がある。

ところで風という文字と言葉を目にして人びとの感性はどのように働き、人びとの想像力はどのようにふくらんでいくのだろうか。想像力を第六番目の感覚と呼ぶことがある。

風という文字には天空や宇宙と虫という文字が入っているように感じられる。虫は、宇宙的自然とともに、大地とともに、人びとのなかに姿を見せる。

ユクスキュルには環境世界という言葉がある。知覚、行動、それぞれを軸として生物それぞれの環境世界像がある。人間にはシンボリック・リアリティがあり、人間独自の意味世界が人間の生存の領域と舞台となっているのである。現象学のフッサールには生活世界という言葉がある。意味が支柱と射程となっている方法、それが現象学だ。

人間は根源的に生命力だ。息を吹きこむと音が生まれる楽器がある。口を開いて声を出すということは驚くべきことだと思う。沈黙には底知れぬ深さがある。叫び声がある。言葉にならないような気持ちがある。告げ知らせるような音や声がある。人びとの日常生活と人生は、さまざまな音や声（聲）によって方向づけられて＝意味づけられてきたのである。人びとを勇気づける音や声があ



る。さまざまな音によって私たちの日常的な行動と行為が支えられてきた。時の流れにおいて消えていった音があるし、新たに生まれた音がある。さまざまな人工音が巷にあふれている。騒音や雑音が耳に触れる。虫の音が聴こえてくる。水の流れる音に耳を澄ますことがある。森や林のなかで林間を渡る風の音やさまざまな鳥の声、虫の声が体験されることがある。

2011年7月19日、私たちは長岡から岩室に到着した。いったん新潟に出て、そこから越後線に到着した。北国街道沿いの温泉地だ。私たちは岩室から近くの弥彦へ、新潟県一の宮、弥彦神社に参拝してからロープウェイで弥彦山頂へ。東京スカイツリーとこの山は同じ高さとのこと。弥彦山頂から日本海の大海原のなかに佐渡を望むことができた。山頂には紫陽花あじさいが咲き乱れていた。佐渡島は、水平線に横たわっていたが、みごとなアイ・ストップとなっていた。

弥彦神社の境内での音体験、音風景、かなかな蝉の大合唱が耳に触れたことを思い出す。蝉時雨という言葉があるが、まさになかなかな時雨しぐれが体験されたのである。自然の恵みによって身も心も癒されたのだ。

高村光太郎には木彫の作品で蝉を主題とした広く知られた作品がある。彼は蝉を風琴と呼んでいる。自然のさまざまな音やリズムを耳にしていると音楽がイメージされる場合がある。

リズムは意味であり、方向だ、といった人物がいる。メキシコの詩人、オクタビオ・パスだ。彼は、人間は実体を欠いている、といったオルテガ・イ・ガセーの言説に共感している。人間は、引きしぼられて飛んでいく矢なのだ。人間は、ここに留まってははいない。リズムは、人びとの生活に深く入りこんでいる。ノヴァーリスは、リズムを方法として理解している。

ところでイタリアのルイジ・ルッソロは、雑音を発する楽器、イントルナモーリを発明しているが、未来派の活動の場面である。地下鉄の車内で雑音を耳にして、そうした音を作曲において生かすことを着想した人物がいる。武満 徹である。

自然音、雑音、騒音、まことにさまざまな音に

よって音風景が生まれている。生起する現象、それが音なのだ。いま、人びとは、どのような音に耳を澄ましているのだろうか。家庭交響曲のなかで人間の声は、いまだのように位置づけられているのか。家のなかで大切な人びとの声が、やさしく耳に触れているのだろうか。いま、人びとは家族全員で食卓を囲み、心おだやかな日々の触れ合いのなかで家庭を築く営みに全員で参加しているか、どうか、不安が残る。

古代ギリシアの時代から今日にいたるまでさまざまな人間観、人間像が見られたことは広く知られている。アリストテレスは、人間をポリスの動物として理解したが、カッシーラーは、こうしたアリストテレスを視野に入れたうえで、アリストテレスをこえて先へ、という意図で人間をシンボルを操作する動物と呼ぶ。ルソーにおいては自然人、社会人が姿を見せる。ゲーテは、『ファウスト』においてひとつの人間像を描き出す。

人間へのアプローチにおいて人間という言葉にこだわった人物がいた。モンテーニュだ。パスカルにおいては人間は考える葦だった。「われ思う、ゆえにわれあり」——こうしたデカルトにおいて姿を見せる人間像がある。

ショーペンハウアーは、人間を生への意志と呼ぶ。ショーペンハウアーがギリシア語とラテン語の二、三の言葉に注目しながら考察をおこなっているシーンがある。

ショーペンハウアーは、アネモネについては特に述べていないが、アネモネは、ギリシア語ではアネモーネーだ。アネモネは風の花だ。ショーペンハウアーは、ギリシア語の風アネモスについては言及している。

意志と知性と生命とのあいだの真の関係についてのある種の感じは、ラテン語においても言い表されている、とショーペンハウアーは、いう。知性とは *mens* だが、これにたいして意志は *animus* だ。意志 *animus* は *anima* に由来する。この *anima* という言葉は、ギリシア語 *άνεμος* アネモス、風に由来する。*anima* アニマとは生命

そのものであり、息であって、心・魂だ。そして animus とは生命賦与原理であり、同時に意志、いわばもろもろの傾向、意図、情念、感情の主体でもある、とショーペンハウアーは論述している。ショーペンハウアーは、ギリシア語、ラテン語のつながりに注目しながら生への意志として人間を理解する道をたどったのである<sup>1)</sup>。ギリシア語、アネモス→ラテン語、アニマ→ラテン語、アニムス、こうした流れにおいて生命、息、心・魂、生命賦与原理、意志がクローズアップされてくる。スタートラインにおいては、アネモス、風だ。風においては明らかに人間がイメージされる。風は明らかに宇宙的自然や大地とともにある。風にちなんだ言葉は、大きな広がりを見せている。——風景、風土、風光、風物詩、風俗、風貌、画風、校風、社風、和風、洋風、日本風、イギリス風、フランス風、風致地区……なんとさまざまな言葉がつぎつぎに姿を見せることだろう。

風とは、風力であり、風向、風景だ。風景は大地の眺め、光景である。風は自然のエッセンス、自然そのものだが、人間にかかわるさまざまな事象や営み、出来事などが、風という文字、言葉と深く結びついている。文化は、風とともにある。風に根ざしているといってもよいだろう。自然と人間は、風によってしっかりと結ばれており、自然も、人間も、人びとの生活や文化も、風のうちにあるのだといえるだろう。環境も、世界も、自然も、大地も、生活も、文化も、風によって貫かれているのである。

風とともに去りぬ、という表現があるが、風とともに留まるものがある。風に運ばれて耳に触れる音がある。風の力と助けを借りて音が生まれる楽器がある。手風琴、アコーディオンがある。さまざまな笛の音がある。立ち昇るような笛の音もある。風を送りこんで音が出る楽器に注目したい。

パイプオルガンの音色を石の森、大聖堂を舞台とした風の音と呼ぶことができるだろう。竹林のなかを吹き抜ける風の音——尺八の音色をこのように表現する場合がある。

古代ギリシアの一場面だが、風が吹いてくると自然に鳴り出す琴をアイオロスの琴と呼ぶ。ノ

ヴァーリスが、アイオロスの琴、という言葉を用いている。ノヴァーリスは、人間は、風琴だ、という。

『藤村詩集』序詩の一部——つぎのような言葉がつづいている。——「生命は力なり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなわち新しき生涯なり」。信州、馬籠<sup>まごめ</sup>の藤村記念館でのメモによるものだ。馬籠は、かつては水が不足していたところだったが、いま、この宿場の道筋、道端にはごく狭い水路があり、水が流れていく水音が耳にやさしい。水車がまわっている。藤村の時代、石臼の音が人びとの耳に触れていた。宿場の音風景がある。

家庭交響音のロラン・バルトが俳句について述べているところだが、バルトは、俳句を水に入れない水中花と呼ぶ。彼は、俳句は一度だけ鳴る澄んだ鈴の音のようなもの、という。俳句の単語は、水中にただ何の目的もなく投げこまれた石のようなものだ。水面の波紋をじっとみつめるのではなく、ぼちゃんという音を受け取る、ただそれだけのこと。フランス、パリのコレージュ・ド・フランスでの講義の一場面だ<sup>2)</sup>。ロラン・バルトの絵画がある。私たちは、パリのポンピドーセンターで〈ロラン・バルト展〉を訪れる機会があったが、彼の絵画はリズムと音楽が体験されるような画面だった。バルトには描く楽しみがあった。

水中花といえばマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』だ。水中花には日本の文化が姿を現している。モネが描く『睡蓮』において体験される静寂がある。永井荷風は、好きな花は、と問われて、水草の花、と答えている。好きな色は、荷風は、青、薄墨もよし、と書く（大正3年8月「文章世界」）。

パリでルーマニア出身の彫刻家、ブランクーシのもとで彫刻の道をたどり、後に風の彫刻家とも呼ばれて大地と環境を彫刻したイサム・ノグチ、彼の生活史には四国、香川県の牟礼が姿を見せている。屋島が借景となっているようなところだ。この牟礼のイサム・ノグチ庭園美術館を二度、訪

れたが、イサム・ノグチのまさに風景彫刻を思い浮かべている。さまざまな石に取り組みながら、彼は大地を彫刻している。

牟礼のノグチの家には「大地の風 #1」と題された長く横たわっている棒状の石の彫刻が姿を見せていた。シンプルな庭だったが、風の大地と風が体験されたのだった。大地と風と風景——イサム・ノグチのモチーフだが、ノグチは、あかりシリーズとも呼ぶことができる照明デザインにも取り組む。牟礼のノグチの家のとある空間には彫刻作品が飾られていたが、おそらくは民族楽器かと思われる打楽器が、部屋のなかに吊り下げられていた。竹製の木琴風の楽器だった。風が吹いてくると音が鳴り出しそうにも感じられた。

庭、縁側——縁側近くちようずばち つくばいの庭に備えられている手水鉢を「蹲」と呼ぶ。東京の最高裁判所の庭にイサム・ノグチの彫刻作品、「蹲」が飾られている。ある時、最高裁判所を設計した建築家の案内でグループで建築と庭と彫刻作品などを参観、鑑賞する機会があり、そのおりにイサム・ノグチの「蹲」を目のあたりにすることができた。石と水の風景だった。

仙台の宮城県立美術館のフロント、正面入口に向かうところにはダニ・カラヴァンの列柱などが姿を見せているが、水琴窟が仕込まれている列柱の地点がある。水琴窟は、耳を澄まして、音へ、という態度が求められるところだ。

京都の詩仙堂は、鹿おどししし(添水、僧都)でも知られるところだが、鹿おどしにおいては水と竹と石である。カーン、という乾いたような音が耳に触れる。一定の間隔、独特のリズムが体験される庭だ。鹿おどしを水と竹と石の音の文化と呼びたい。大気をつき破るような音のトポスだ。

京都、龍安寺——イサム・ノグチも、ジョン・ケージも、また、数多くの人びとや旅びとがこの寺の石庭の空間とトポスを体験してきた。ジョン・ケージには、龍安寺をモチーフとした作品、作曲がある。イサム・ノグチは、龍安寺に強い印象を受けている。

ジョン・ケージには「4分33秒」と題された作品がある。ピアニストがステージに現れてピア

ノを前にして椅子に腰かける。4分33秒のあいだ、ピアノの音は流れない。聴衆の耳にはピアノの音も音楽も触れない。4分33秒たって演奏者はピアノから離れて、姿を消す。聴衆の耳には、ざわめきやそのほかさまざまな環境の音が触れていたのである。音のシーンとしては衝撃的な光景だ。

音は、まことに微妙であり、ある意味ではとらえどころがない。手で触れてそれが何であるかを確認することができる。ポール・ヴァレリーは、手で触わって確認することによって現実が体験される、という。手によってもたらされる現実感、重要だ。触れることは、さまざまな体験の焦点であり、中心点だ。

耳を澄まして、ということは、積極的に音に触れることだが、たえまなしにさまざまな音が耳に触れるはするものの、音は目に見えないし、音そのものに手で触れることはできない。だが振動する音に手で触れることはできる。

ヘレン・ケラーは、接触体験と振動体験によって光のなかに立つことができ、さまざまな現実感を体験しているが、ピアノの音色や音楽を体験する時には、ピアノのそばに身を寄せて、ピアノに手で触れながら全身でピアノと音に触れたのである。

さまざまな音を正確に言葉で表現することはきわめて困難だ。ラッパの音色、ピアノの音色、シンフォニーの音色や響、つやなどといっても、まことに微妙であり、ラッパの音色もまことに多彩だ。音の深みの極致、それが音楽だと思う。風の音、流れゆく水の音といっても言葉で表現することは難しい。擬音語や擬態語、オノマトペはあるが、音そのものには、言葉や表現をはるかに超えた広がりや様相がある。消えていく音の底知れぬ深さと無限性がある。

森羅万象、環境や世界、宇宙的自然と大地、人間の生活と生存、人生が、風とともにあり、風によって貫かれているように感じられる。頼りになる風もあるが、手強い風もある。あくまでも自然としかいいようがない風、また、人間の姿や生活が浮かび漂っているような風、文化と呼びたくなる風がある。人間においても、日々の暮らしや生

活文化においても風をイメージしないわけにはいかない。

屋敷林、富山県の<sup>とたみ</sup>砺波平野の散居集落ではカイニョと呼ばれてきた屋敷林は、防風林であり、また人びとに安堵感をもたらしてくれる自然景観、生活文化の景観だが、屋敷林によって風の音もしずまるのである。

柳田國男は、「庭園芸術の発生」について考察した時にこうした屋敷林についても言及しているが、柳田は、「いささ小川のせせらぎの音」によってそこに住んでいる人びとに安堵感をもたらされていた、と述べている。静かに、やさしく耳に触れる音によって生まれる生活と居住の環境とトポス（住居・家・場所）がある。柳田は、あるところで市の聲、山の聲という言葉を用いているが、人びとの生活や大地の地点や場所などを理解しようとする時には音は有力な手がかりとなるのである。

陶芸家、河井寛次郎は、自分の生活と生活史を回想した時、<sup>おとしるべ</sup>音標という言葉を用いている。季節の到来や自然や環境の移り変わりを告げ知らせてくれる音、まさに音標がある。激しく変わりゆく現代、人びとは、音標にどれほど耳を澄ましているのだろうか。季節と季節感は、空の色や空に浮かぶ雲の姿と形、草花、樹木の姿、木の葉、さまざまな風、さまざまな色や形によって体験されてきたが、季節感が体験される音がある。風が吹いてくる方向や風の強弱の状態が変わると森や林のなかや森の近くで体験される音にも変化が見られる。風は風力、風向そのものだ。屋敷林や風車などによってイメージされる風がある。屋敷林や風車、風車小屋などは、風景、景観となった風であり、それらは風の風景なのだ。吹流しや旗、また、風見鶏、それらも風の風景であり、風を待ち受けているような大地の片隅、特別なトポスがある。かつて南フランスのドーデの風車小屋を訪れたことがある。

パリ、モンマルトルの丘に風車がいくつも見られた時代がある。ゴッホは、パリ時代、モンマルトルの風車を描いている。モンマルトルの丘にかつてムーラン＝ド＝ラ＝ギャレットと呼ばれた人

びとの楽しみの舞台があった。ルノワールが、ここに集ってダンスを楽しんだり、談笑したりしている人びとを描いている。人びとの話し声やダンス音楽が耳に触れるような画面だ。耳を澄ましながら画面を旅したい絵だ。カップルで踊っている男性は、この絵を眺めている私たちの方を見ている。

まなごしの互酬性に注目しているジンメルは、耳は受け取る一方で与えることはしない、という。ジンメルの感覚の社会学の地平に注目していきたいと思う。

音、それは、人生の旅びと誰もがそこで生きてきた、また、生きつづけている環境や世界の指標、道しるべ、支え、よりどころなのである。音、音楽、雑音、騒音、環境の音、いわば音風景に耳を傾けるならば、私たちは、多元的現実の深さと人間の生活と生存の姿と方法、宇宙的自然と大地について深い思いを抱かないわけにはいかないだろう。いずこにおいても耳に触れるさまざまな音や音の多様な様相が体験されるのだ。

ある日、庭に出て、久しぶりで草取りをする。大地、土や苔や草との触れ合い、草を取る（むしる）時の音が耳に触れる。午前11時すぎのことだったが、鳥の鳴き声、その鳴き声はしばらくして止んだが、こんどは、また、さきほどとは異なる鳥の鳴き声が樹間に響く。白木蓮が中心となっている庭だが、春になると庭の片隅、隠れたようなところにベツレヘムの星と呼ばれる花が咲く。いつのまにか姿を見せた花だ。キリストの降誕にともなった伝説の花であり、クリスマスツリーの先端部分に飾られる星、それがベツレヘムの星である。レオナルド・ダ・ヴィンチが、ベツレヘムの星とアネモネ＝風の花を描いている。素描である。

風——さまざまな思いがふくらむ。

風が吹いてくると、いったい何がどんな音を発するのだろうか。手で振ると音が出る鈴やさまざまな音具、音の玩具がある。振鈴がある。合図の音がある。音を楽しむための装置や工夫がある。オルゴールの音色と楽しみもある。

2011年5月9日、月曜日、朝日新聞、朝刊——つぎのような記事に注目したい。タイトルにあたる場所は——〈風の電話よ あの人に思いを伝えて〉、〈「会えなくなった人と話して」 岩手・大槌の庭師、自宅の庭に〉——記事を紹介したい。

風に乘せて、会えなくなつた人に思いを伝えてください——。岩手県大槌町の庭師／が震災後、自宅の庭に「メモリアルガーデン」を造り、／「風の電話ボックス」を置い／た。犠牲者や行方不明者の親／族らの「心の復興」のきっか／けになれば、と話す。

庭は10メートル四方くらい。祈り／の像と、海岸に向けて腰掛け／られるベンチがある。敷石の／先に白い電話ボックスがあ／り、中にダイヤル式の黒電／話。震災前から不要になった／ものを譲り受けて置いていた／ものだった。

「風の電話」は、佐々木<sup>いたる</sup>格さん(66)が震災前から考えて／いた。一人っきりになって電／話をかけるように相手に思い／を伝える空間で、実際の電話／線はつながっていない。その／電話機の横にはこう書いた。／

「風の電話は心で話します／静かに目を閉じ 耳を澄ま／してください 風の音が又は／浪の音が<sup>ある</sup> 或いは小鳥のさえずり／が聞こえたなら あなた／の<sup>おも</sup>想いを伝えて下さい」(以下略)——(東野真和)

この記事には「風の電話ボックス」とその近くのベンチに座る佐々木格さんの新聞写真が添えられている。

人間も社会も、自然も文化も、さまざまな音とともにあり、人びとの人生や日常生活には、音や音楽が、まことに多様な状態で入ってきているといえるだろう。人間の生活と生存の深いところで人間の声・聲や音が日常的に体験されてきたのである。音の力や音楽の力がある。

ベートーヴェンは、「音楽は、不思議な力に満ちた大地だ。人間の精神は、そこに生き、そこで思考し、そして創造する」という言葉を残している。ジョン・ケージは、音の永続性に信頼を寄せ

ており、音に音楽を託している。ソローは、音楽に安心感を感じ取っている。ジョン・ラスキン——「人生の音を正確に、正しいテンポで弾けば、人の一生は音楽になる」。つぎにアンリ・ベルグソン——「音楽は、日々の生活をおおっているヴェールを払いのけ、われわれを現実そのものと向かい合わせるためにのみ存在している」<sup>3)</sup>。

ポール・ヴァレリーは、音楽についてつぎのように述べている<sup>4)</sup>。

音楽は、純粋可能性を刺戟し活性化する最も協力的な道具(非化学的)である。

それは可能性の芸術だ。

一つの音が諸々の音の全体系をほとんど現前状態におく——そしてこれが楽音を雑音から本来的に区別する点である。雑音はそれを産みだした原因をさまざまに考えさせ、反射と行動の体験をとらせる——だがそれは、感覚の内在的系統の切迫状態を惹き起しはしない。

音楽における、あるいは言葉における沈黙。

音楽、諸々の変化を定着する唯一の芸術。

音の大地、音の河、音の庭——武満 徹である。武満は、一音、一音に、音に、音と音との<sup>はざま</sup>間に特別な関心を抱いていた。彼が見るところでは西洋の音楽、例えばベートーヴェンの場合、音楽は築き上げられていく姿を見せていたが、東洋の音楽は、堀りさげていくという表現がふさわしい人間の営みなのである。ジョン・ケージやイサム・ノグチなどに関心を寄せていた彼は、作曲を作庭、いわば音の庭づくりと心得ていたのである。沈黙と測り合えるような音——こうした表現に武満徹の態度と方法が凝縮されている。

柳田國男には市の聲、山の聲という言葉が見られたが、永井荷風には「巷の聲」、「虫の聲」、「鐘の聲」と題された文章がある。音が声と結ばれていたような時代がある。音、声という言語感覚に注目したいと思う。時代の流れにおいて声から音

へ、という方向性がうかがわれるのだろうか。物売りの声人がびとの耳に触れていたような時代があった。

2011年11月1日、小山田にいる。バス停は池谷戸だ。空には白い道と呼びたくなるような一筋の雲が浮かんでいる。澄み切った秋空だ。こぶしの樹木と木の葉が空にとけこんでいる。ここは〈風〉のトポスだが、今日、風はほとんど感じられない。もうだいたい日がたっているが、吾亦紅<sup>われもこう</sup>の姿、形がくずれない。どことはなしに哲学的で音楽的な花と呼びたくなる。五線譜の音譜が空に舞っているようにも見える。吾亦紅のリズム感と空間性がある。広がりゆく音譜だ。

時は過ぎていく。過ぎ行く時によって生まれる意味がある。人間は意味のなかで、意味の大地で人生の日々を旅しつづけているのである。



人間、時間、空間——言葉は別々だが、こうした言葉は、切り離しがたい状態で深く結びついており、あらゆる現象、事象、まさに万象が、時間と空間において理解される。

カントは、時間と空間を感性の形式と呼んだが、時間と空間は、感性の内容となっているようにも思われる。人間の生活と生存、人びと、それぞれの人生は、時間と空間によって形が与えられ、また、時間と空間によって意味づけられているといえるだろう。

メルロ＝ポンティは、大地は時間と空間の母胎だ、という。太陽が昇ってくる方向があり、太陽の動きがある。「太陽は日ごとに新しい」。ヘラクレイトスの言葉だ。古代ギリシアからの言葉の流れだが、〈目と太陽〉に注目していたゲーテにとっては目で見て確かめることが自分の方法だったが、感覚と感性は、五感と想像力において深く理解されるのである。

人間は、身体によって、感覚や感性、想像力によって環境や世界、大地や宇宙的自然、風景や音風景と結ばれている。人間の生活と生存を支えているすべてが、いわば人間の大地ではないかと思

う。支えとよりどころ、道しるべなしで生きることとはできない。宇宙的自然から始まって手もとや居住や生活の空間に見出されるこまごまとした品々、道具や作品にいたることごとくが、人間の支えやよりどころ、舞台となっているのである。

社会を出来事、生起するところの事象として理解したジンメルは、大都市の生活は、懐中時計と信号機によって支えられている、と述べている。生の哲学のジンメルだが、懐中時計と信号機とともに客観的時間が浮かび上がってくる。こうした時間は制度としての計測される時間だが、人間には内的時間意識（フッサール）があり、人びと、それぞれが体験した、みずからが生きた、時間、いわば意味づけられた人間的時間がある。限りなく深い日々や思い出によって支えられた生存の時間がある。こうした生存の時間、人間的時間とともに人間の相貌の輝きが増す。

ミヒャエル・エンデは、人間の心の大切さを強調している。文明によって切りくずされることのない人間の生存の重要性をめぐって数々の言葉が見られるが、エンデがいう内的時間に注目したい。時間に追われて人間性が失われていく事態にエンデは、警告を発している。

人生の旅びとは、できるだけ深く広い時間を生きながら一日、一日を意義深く築き上げていかなければならない。

ドイツのミュンヘンに飛ぶ。2011年11月3日（木曜日）スケジュールでは成田空港からの出発は、13時10分、ルフトハンザ航空715でミュンヘン到着は、同日の17時25分、実際には少し遅れて18時を過ぎてからドイツの芸術文化の一中心地、ミュンヘン空港に降り立つ。

空の旅では風景と地図の微妙な関係や時間と空間の様相、時間感覚と空間感覚、移動感覚などが、如実に体験される。東京とミュンヘンの時差は、およそ8時間、同日に到着という空の旅だった。機内の客席のすぐ前のイマージュ、映像にはさまざまなデータが表示される。高度、速度、目的地（現地）までの所要時間、現地の時間などが、つぎつぎに示される。また、地図上のどこを飛行し

て、いま、どこの地点を飛行しているのかということが示される。位置の確認が持続的におこなわれたのである。空間と時間が、地球とともに凝縮されて体験される旅、それが空の旅だ。時差、昼と夜が、こうした旅においてクローズアップされてくる。

イマージュ、映像に表示された言葉がある。そうした言葉のひとつ——Uhrzeit am Zielort、現地、目的地の時間である。日本時間との時差がチェックされる。ドイツ語 Ort は、槍の穂先、一点、地点、その場所を意味する。ギリシア語、トポス τόπος とほぼ同義の言葉だ。

いまとここ——誰もがいつも気かけながらチェックしていることだ。トポスというギリシア語には位置、ところ、場所、地点、家、部屋、坐席、また、村や町、都市などの集落などという意味がある。

空を旅したサン＝テグジュペリは、自分を空港を耕す農夫と呼んでいる。彼は人間を住まう者としてとらえているが、彼のまなざしは、空や雲に向けられていたばかりか大地と大地における人間の営みにも注がれていたのである。サン＝テグジュペリは、目的地やコース、方向から目を離さなかった人物だ。——「人生に意味を」という彼の言葉に注目したい。意味は、フランス語では、サンス sensだが、この言葉には方向という意味がある。サンスという言葉には初めに感覚という意味がある。感覚には意味／方向が含まれているのだ。

瞬間的な音、持続的な音、リズムカルな音などさまざまな音があるが、音は消えていく。絵画の画面に見られる点や線や面、色彩、形、コンポジション、タッチ、明暗、光などは絵画と呼ばれる舞台にそのまま残っている。画面は幕が降りない舞台だ。絵画は光の到来であり、光景なのである。

消えていく音には音の深さと無限性、音の地平の広大な時間と空間が感じられる。音楽を時間芸術と呼ぶことがあるが、音楽の時間性と空間性に注目したい。音の強弱、音の遠近感において空間が体験される。トポス、場所の空間性やコンサー

トホルの様相に応じて音の効果や音響の様相が変化する。残響における音体験がある。環境の音を音風景と呼ぶ。風景は大地の様相であり、空間と時間の、また、環境の光景だが、さまざまな風景が音によって貫かれていることに注目したい。音によって風景の表情は、生き生きとした現実となっており、大地の息吹と生命感が、はっきりと体験される。現実感は重要だ。効果音と呼ばれる音がある。

「私は私と私の環境である」といったオルテガ・イ・ガセーは、環境を風景として理解している。人間にとっては大地とともに風景も、音風景も母胎なのだ。人生の旅びとの生活史に姿を見せている原風景があるが、耳の記憶、記憶の音風景によっても人間がかたちづくられてきたのである。

音は消えていくが、人びと、それぞれの記憶の音や耳底に残っている音があると思う。人びと、それぞれの生活と生存がさまざまな音とともにあったことを思う時、いたるところで耳に触れる音に、また、特別な音などに耳を傾けないわけにはいかないだろう。

ところで絵画は音を立てない、ひたすら黙して語らず、とと思っている人が多いかもしれないが、耳を澄まして画面を見るならば、人間の話し声やさまざまな物音、生活の音、自然の音、音楽、楽器の音色などが私たちの耳に触れる。耳を澄ましながら絵画作品を眺めるならば、絵画が時には多弁であること、さまざまな音が画面に流れていること、絵画が沈黙の舞台に終始するものではないことが、明らかとなる。フランス語では静物を死んだ自然、ナチュール・モルトと呼ぶが、静物画は、静物の舞台にすぎないわけではなく、静物はさまざまな生活や居住の環境やさまざまなトポス、例えば部屋に位置づけられているから、沈黙と音に耳を澄ましたいと思う。音が体験されなかったら画面は沈みこんだ状態になってしまうだろう。人物画は、黙して語らずの絵画に見えるが、顔は言葉と声と無縁な冷たい壁にすぎないわけではない。顔面には言葉や声が浮かび漂っているのだ。

風景は黙して語らず、とと思っている人びとがい

るかもしれないが、音風景となっている風景画やさまざまなジャンルの絵画がある。さまざまな画面の音は消えない。感性と想像力を働かせながら、耳を澄まして、絵画と呼ばれるドラマの舞台を体験したい。

大地や宇宙的自然、また、人びとの生活と人生は、音とともにある。だから絵画の主題や対象がどのようなものであろうと絵画的な光景、生活情景、風景は、音風景から切り離されているわけではない。確かに静寂に満ち満ちた絵もあるが、絵画を音風景として体験することによって絵画作品の遠近感と立体感、現実感と深み、絵画体験の驚きが体験されるのである。

音から切り離された時間と空間、環境と世界、トポスと道、大地と生活の舞台はない。音や音風景に耳を澄ますことによって環境や世界、人間の生活と生存の様相が、一層、深く現実的に理解される。人間の感性と想像力が、また、人間の感性と行動が、さまざまな音や音風景、音楽によってどんなにかゆたかに育まれてきたことだろう。

ミュンヘンの絵画、アルテピナコテーク、ノイエピナコテークと呼ばれる世界的に名高い絵画館(ピナコテーク)がある。ここではいくつかの絵画に耳を傾けて、耳を澄まして画面と対話したいと思う。

○ レオナルド・ダ・ヴィンチ——「聖母子」(1473年頃)——宗教画だが、背景には山岳風景が描かれており、風景画の始動がイメージされる。沈黙と静寂のなかで声や音に耳を傾けたい。

○ ピーター・ブリューゲル——「田舎の結婚式」(制作年代、不明)——遠近感をともなって田舎の人びと、男女がにぎやかに姿を見せており、踊る人びとのにぎやかな音や人びとの声、楽器の音色が耳に触れる。奥の方に花嫁の特別席がある。新郎はどこにいるのか。にぎやかな音の絵画だ。この二点は、アルテピナコテーク所蔵の絵画作品である。

つぎにいずれもノイエピナコテーク所蔵の絵だ。

○ マックス・リーバerman——「ミュンヘンのピアガーデン」(1883年-84年)——屋外、木も

れ日のなかに、緑ゆたかなところに大勢の人びとが集まって、野外、緑陰のひとときを過ごしている。ビールを飲んでいる人びと、談笑する人びと、母親と子ども、子どもたち、ビールを運んでいる女性……さまざまな人間関係と人間模様、日常生活と人生の日々などが表現されている。画面の後方、ピアガーデンの奥の方に音楽を演奏中の人びとが描かれている。緑陰の楽園にふさわしい音楽が流れている。この画面の手前にあたるところに地面に落ちてしまった人形を拾おうとして、しゃがみこんでいる少女が描かれている。人と人とのつながりと縁が気になる。家族像が浮かんでくる。生活画、風俗画だが、人間的空間と社会的世界が、緑陰の風景とともに描かれている。耳を澄ましながら、描かれている人びとのなかに入りたい。画面のほぼ中央にやや傾きかげんの椅子が描かれている。リーバermanのトリックと呼びたくなるシーンだが、人形を拾おうとしている少女を描いているところにも彼の画才と感性がうかがわれる。ミュンヘンの人びとの生活情景の作品だ。

○ ゴッホ——「織る人」(1884年)——織機を操りながら布地を紡ぎ出している男性が描かれているが、正方形の窓が内側に開かれていて、窓からは働いている農婦、一人とかなたの教会が見える。織機の音が耳に触れる。窓からいくらか風が入ってきているのだろうか。窓は目の通り道だが、家の目、部屋の目である窓は、風の通り道、音の通り道なのだ。

○ グスターフ・クリムト——「音楽」(1895年)——聴き入るように楽の音を奏でている女性が装飾的に描かれている。独特の姿、形の楽器だ。絃に触れている女性の手に注目したい。まことに視覚的な音風景の作品だ。どのような楽の音色とメロディが私たちの耳に触れるのだろうか。

○ クロード・モネ——「睡蓮」(1914年-17年)——描かれた白い花、睡蓮ひとつ、少しはなれたところに赤味をおびた睡蓮が3つ、花数は少ないが、印象的な水面だ。池は水鏡、空が映っている。数少ない睡蓮のリズム、花と花との間<sup>はざま</sup>が体験される。モネは水の風景を描きたかったのだ。池のほとりでモネの耳にはどのような音が触



れていたのか。

私たちは、家族三人で二度、フランスのジヴェルニー、モネの館と庭を訪れている。さまざまな花が咲き乱れていた庭と水の庭とのコントラストがみごとだった。4月初めだったので水の庭に睡蓮を見ることはできなかった。モネが描いたさまざまな睡蓮、水の庭は、印象という言葉にふさわしい風景画だ。水と音、風と音——こうした音風景に耳を澄ましたいと思う。ジヴェルニーの大地の音風景がある。

武満 徹が特に注目していた絵画がある。それは、ルドンの「目を閉じて」と題された作品だ。目を閉じた姿の女性が浮かび漂うような花々とともに描かれた絵画であり、同じ題名の作品が何点かある。目を閉じては、作曲を音の庭づくりと心得ていた武満 徹にとっては、耳を開いて、耳を澄まして、だったのだ。水——夢——数字が、音の作曲家、武満 徹において特別な意味を持っていたが、音の大地となっていたのは、彼の場合、水だったといってもよいだろう。信州、浅間高原、御代田、武満の信州の家が御代田にあったが、散歩のおりに武満はコースにあった真楽寺に立ち寄っている。この寺の境内には湧水池があり、武満は、この池のほとりで曲想を思い浮かべていたのである。私たちは、長野、小諸と旅した時に御代田の真楽寺を訪れて、この湧水池のほとりに立ったが、この池は樹林を映すみごとな鏡池だった。

音の大地、音の河、音の庭、いずれも武満が用いた表現だ。「ノヴェンバー・ステップス」などの作曲家、武満 徹は、音の大地と河をできるだけ深く生きながら、沈黙と測りあえるような音の庭を造園しようと試みたのである。音、一音、音と音との間はざまに彼ほど心くばりをおこなった作曲家はいないだろう。

ミュンヘン——新市庁舎のからくり時計、グロッケンシュピール Glockenspiel は世界的に名高い。2011年11月4日、私たちは10時45分頃新市庁舎前の広場に到着して記念像のかたわらで

この庁舎の塔を見上げながら、仕掛けられた人形が動き出したり、踊り出したりする姿を待った。11時、近くの鐘の音と新市庁舎の時鐘とがほとんど同時になり出し、それからこのグロッケンシュピールの開幕となった。カリヨンのメロディによって上段の人形・人物などが5分間ほど動き、まわり、それから下段の人形・人物などが5分間ほど動き、踊るといって演出だった。鐘とカリヨンの音風景だった。ジャック・ル・ゴフには「教会の時間と商人の時間」と題されたエッセイがあるが、ミュンヘンの新市庁舎の広場で、グロッケンシュピールとともに、鐘の音とともに「教会の時間と商人の時間」のことがよみがえったのである。

ヨーロッパの諸都市やさまざまなトポスでは、鐘の音は、その大地、その都市の原風景となっているといってもよいだろう。

マックス・ウェーバーは、都市を異郷の人びとが集うところと呼んでいる。ウェーバーにおいては市が立つところ Marktort が深い意味を持っていた。——ミュンヘン、イザール川の右岸にはマックス・ウェーバー広場がある。ミュンヘン大学でのウェーバー、「職業としての学問」は、この大学でのウェーバーのスピーチである。

このミュンヘンの中央駅からスタートするといってもよい通りのひとつにゲーテ通りがある。

「初めに行為があった」というゲーテの『ファウスト』の一シーンのファウストの言葉だけでゲーテは、社会学において、また、マックス・ウェーバーにおいて存在感がある人物だ。この『ファウスト』の一シーンに姿を見せた、言葉、意味、力、行為、これらのことごとくが、社会学や人間学において注目される。音や音楽がクローズアップされるシーンでもある。マックス・ウェーバーは、楽器や楽譜や音楽へのアプローチを試みている。マックス・ウェーバーとゲーテとの距離は近い。

11月4日、私たちは、新市庁舎広場の近くからタクシーを拾って、ミヒャエル・エンデの地へ Das Michael Ende Museum——ミヒャエル・エンデのムゼウムは、ブルーテンブルク城の一面、建物の屋根裏部屋に設けられていた。窓からの景

色、風景が、エンデの作品、仕事、彼のキャリア、社会的世界、人間的空間とともに、この城の地で体験されたのである。この城は、国際児童図書館となっており、エンデのムゼウムは、この図書館と一体となっていた。—— Das Michael Ende Museum in der Internationalen Jugendbibliothek Schloss Blumenburg

ブルーテンブルク城、城とはいっても堅固な城砦、城塞、ではなく親しみやすい館という感じの建物だった。バシュラールは、世界の片隅である家を城、貝殻、繭、巣と呼んでいるが、このブルーテンブルク城は、城というよりは、どことなく繭、巣に近い感じのトポスだった。水辺と水面が姿を見せており、その向こうの方には黄色い花畑、菜の花の大地が姿を見せていた。

エンデのムゼウム、記念のトポスには、彼の作品、著作活動の品々などが展示されていたが、エンデの黒い帽子とステッキが展示されていた。ギターを楽しんでいたのだろう、ギターが展示されているコーナーがあった。日本に親近感をいただいていたエンデをしのぶために、このムゼウムには障子の片隅があった。広くはないトポスだったが、屋根裏部屋の気配が漂っている空間が、印象に残っている。窓は開かれていたが、風の気配はなかった。いま、ブルーテンブルク城は、地球（大地の詩、ソローの表現）上で児童図書館の中心地、発信地となっているところであり、ミヒャエル・エンデにふさわしい大地となっている。

誰であろうと人生の旅びとは、まことにさまざまな体験が重層的に交差するところで、宇宙的自然および大地とひとつに結ばれながら、人びとのなかで、人びとともに、人生の一日、一日を生きてつづけている。環境と世界において誰もがこの私はいったい誰なのか、という問と向き合いつづけている。時間と空間、自分の居場所と位置、状況などを確認しながら人間的世界の構築に取り組みつづけている私たちにとって自分とは異なる他なるものごとくが、私たち、それぞれの生活と生存のための支え、よりどころ、手がかり、足場、道しるべとなっている。

さまざまな音や色や形などによって私たちはどんなにか救われてきたことだろう。光が乏しくなると色や形などが不明となり、真暗闇の状態ではどうしようもない。視界が閉ざされても音は耳に触れる。音に寄せる私たちの信頼感がある。

2011年11月7日（月曜日）、ミュンヘン中央駅発、9時27分の列車でモーツァルトの生まれ故郷、オーストリアのザルツブルクに向かう。出発の時からいくらか霧がかかっていたが、そのうちに濃霧となり、白い闇が訪れる。視界が閉ざされてしまう。10時13分頃から霧が消えていき、青空が見え始める。10時25分、太陽が姿を見せる。日が射してきた。波打つ大地のおだやかな風景や家々、集落の景観などが車窓に浮かぶ。耕された大地、湖水、遠くの山なみ、牧場、一筋の道、さまざまな林が目に触れる。黄葉の風景だ。

柳田國男は列車の窓を〈風景の窓〉と呼んだが、こうした窓の魅力は、はかりがたいほど大きい。部厚い音の壁のなかに閉ざされてしまうことなしに大地の片隅、片隅において人間の救いとなるような音に耳を澄ましながら人生行路を歩む楽しみを深めていきたいものだ。

いずこにおいても大地は織物や図柄や模様のような姿を見せている。ソローは、地球を大地の詩と呼んでいるが、大地の詩は、まことにさまざまな音とともにあることをこの現代において深く理解しなければならない。

風景と並んで音風景によって人生の旅びともたらされる恩恵が、いかに多いことだろう。人間の生活と生存の舞台と方法となってきた音に耳を傾けながら、耳を澄まして日常生活を営んでいきたいと思う。

デルポイの神殿の銘“汝自身を知れ”という言葉葉を音への方向性において理解することも有意義なことだと思う。

\*

このエッセーは、音風景、音の社会学、社会学、感性行動学の研究者、山岸美穂との対話によって支えられた作品である。(2011年11月7日)



MAX LIEBERMANN(1847- 1935)  
Münchener Biergarten  
1883-84, Öl auf Leinwand  
95×69cm  
München : Neue Pinakothek

## 文 献

- 1) ショーペンハウアー (1996年). 『ショーペンハウアー全集 6 意志と表象としての世界・続編 II』(塩屋竹男ほか訳) 初版, 白水社, 83頁。
- 2) ロラン・バルト (2006年). 『ロラン・バルト講義集成 3 小説の準備』(石井洋二郎訳) 初版, 筑摩書房, 257頁。
- 3) ミッキー・ハート, フレデリック・リーバーマン編著 (2002年) 『音楽という魔法音を語ることばたち』(山田陽一・井本美穂共訳) 初版, 音楽之友社, 137頁, 191頁, 144頁。
- 4) ポール・ヴァレリー (1982年). 『ヴァレリー全集 カイエ篇 8 芸術と美学 詩学 詩について 文学 詩篇及びPPA』初版, 筑摩書房, 83頁, 6頁, 芸術と美学, 三浦信孝訳。

## 参考文献

- 山岸 健 (1978年). 『日常生活の社会学』NHKブックス309, 21版, 日本放送出版協会, 東京.
- 山岸 健 (1997年). 『絵画を見るということ 私の美術手帖から』NHKブックス786, 3版, 日本放送出版協会, 東京.
- 山岸 健・山岸美穂 (1998年). 『日常的世界の探究 風景／音風景／音楽／絵画／旅／人間／社会学』3版, 慶應義塾大学出版会, 東京.
- 山岸美穂・山岸 健 (1999年). 『音の風景とは何か サウンドスケープの社会誌』NHKブックス853, 3版, 日本放送出版協会, 東京.
- 山岸美穂 (2006年). 『音 音楽 音風景と日常生活 社会学／感性行動学／サウンドスケープ研究』初版, 慶應義塾大学出版会, 東京.
- 山岸美穂・山岸 健 (2006年). 『感性と人間 感覚／意味／方向 生活／行動／行為』初版, 三和書籍, 東京.
- 山岸 健 (2007年). 『レオナルド・ダ・ヴィンチへの誘い 美と美徳・感性・絵画科学・想像

力』初版，三和書籍，東京。

山岸 健〈責任編集〉編集 草柳千早・澤井敦・  
鄭 暎恵 (2007年). 『社会学の饗宴 I 風景の意味—理性と感性—』, 『社会学の饗宴 II 逍遙する記憶—旅と里程標—』 三和書籍，東京。  
山岸 健・山岸美穂 (2008年). 『日常生活と旅の社会学 人間と世界／大地と人生／意味と方向／風景と音風景／音と音楽／トポスと道』 初版，慶應義塾大学出版会，東京。

---

幸田 文／青木 玉編 (2009年). 『幸田 文台所帖』 平凡社，東京。



信州，御代田，真楽寺：武満 徹の大地と水